

産経新聞

分煙環境実現へアイデア喫煙所

改正健康増進法の施行や感染症対策などを背景に喫煙できる場所が減少している。たばこを吸う場所が見つからない人による路上喫煙や吸い殻のポイ捨てといった問題が浮上し、適正な喫煙所整備の必要性が議論されている。こうした中、防災喫煙所や「仕掛学」を応用した喫煙所など、機能やアイデアを詰め込んだ喫煙所が登場。マナーを考え、多様な人が共存する街を考えるきっかけとして注目されている。

受動喫煙対策として、屋内を原則禁煙とする改正健康増進法が全面施行されたのは令和2年4月。さらにコロナ禍で喫煙所の閉鎖が相次ぎ、公園や路上での喫煙やポイ捨てが増加している。



「マナー啓発なども行われてきた中で、『分かっていても、面倒くさい』など、それぞれの理由がある。正論をぶつけても変わらない。切り口を変え、興味や

「マナー啓発なども行われてきた中で、『分かっていても、面倒くさい』など、それぞれの理由がある。正論をぶつけても変わらない。切り口を変え、興味や

けているが、においなどへのマナーやメンテナンスや維持管理の難しさとといった課題から整備は進んでいない。

光学迷彩型や防災機能付きが登場



仕掛学を応用した喫煙所。自身の姿が映り込むことによってマナーを考えるきっかけとなる。大阪市北区（松村真宏教授提供）

楽しさをきっかけにして、行動を変えてもらえる仕掛けが必要なのは「
そう指摘するのは大阪大学大

松村教授は、ユニークな選択肢提示によって人の行動変容を

楽しさをきっかけにして、行動を変えてもらえる仕掛けが必要なのは「
そう指摘するのは大阪大学大

学院経済学研究科の松村真宏教授。写真。昨年12月、大阪市北区の「うめきた外庭SQUARE（スクエア）」に、仕掛学を活用した「光学迷彩型喫煙所」を設置、実証実験を行っている。

引き起こす学問として知られる仕掛学の研究にも取り組んでいる。

れを設置。昨年9月に同区内で検証したところ、ポイ捨てが設置前と比較して9割減少したという。現在は横浜市西区の横浜駅西口五番街に設置している。

光学迷彩型喫煙所はステンレスミラーの柱を林立させたアート作品のような外観。離れると鏡の視覚効果で喫煙所が風景に溶け込むような錯覚が起こる。一方、利用者の姿はしっかりと鏡に映っている。

また、日本たばこ産業（JT）と防災教育を行うNPO法人、プラス・アーツ（神戸市中央区）は、人が集まる場所にある喫煙所の立地を生かし、そこに防災機能を付加するプロジェクトを展開している。

松村教授が注目したのは人の目を気にする心理。「施設は街に溶け込むが、珍しい外観で逆目に向けられる。鏡に自分が映し出され、自他の視線でマナーを意識してもらう効果がある」と狙いを説明する。

昨年12月には東京都新宿区の新宿中央公園内の喫煙所を「防災喫煙所 イツモモシモステーション」としてリニューアル。パーティションの仕様を工夫し、災害時に帰宅困難者が利用できる物品を保管する防災倉庫を設置するほか、内壁には防災情報を掲出した。

喫煙所ブランド「THE TOBACCO（タバコ）」の運営を手掛けるコンド（東京都渋谷区）も、行動経済学を応用した投票型喫煙所でポイ捨て対策に取り組んでいる。

JTでは「防災機能を加えたことで、地域や周辺で働く人の防災拠点として役立つ。新しい価値を生み出していく」としている。